

ニューヨークにて, Nov. 10, 1976

中 村 賢一郎

3月中旬を Ala Moana, Oahu, H.I. で過し, 当学部の吉田忠雄教授に会った。物価高に驚き早々に去る。下旬, San Francisco に着く。生れて以来はじめての外国, 印象は強烈。最初に電話したのは Prof. D. F. Dowd (UC at Santa Cruz) で, 英語が通じたらしく, 翌日 (Mar. 26 金) Hotel Californian まで迎えにきてくれた。日本は M. C. Perry の来航 (1853-4) なしに開国しえたか, と開口一番, 歴史論談。食後, Frisco (これはキャウ・ボーイ用語で使うな, という) の日本人街に行き箱根大名行列をみて Pedestrian Mall (これもメエールと発音) で分れた。4月上旬, かねて約束の San Diego 州立大 (学生数は約3万人) のゼミに参加, 夜は Prof. Norris 宅で研究会。利潤率の産業部門別格差がなぜ生ずるか, を話し合う。4月中旬~5月上旬を再度 SFO で過し, UC at Berkeley や UC at Santa Cruz に遊ぶ。5月中旬, Jesse and Linda Schwartz の招きで SAN と LAX をたずね, 彼らの家に数日間滞在, UC at Riverside で渡米最初の研究報告 (不況下の日本) をする。Prof. E. K. Hunt が強い関心を示した。Howard Sherman が Monopoly Power and Stagflation

を発表したが、依然として hearing が不十分で、乗数などモーター・パイと聞える。speaking もいけない。例えば SAN を 仙 台 英 語 といったら、やっと “That’s it. You did it”. という始末。こんな状態ではどうにもならないと思い、SFO に戻って Adult School に通うこと 2 週間。

僕の誕生日を（露天パーティで）Coit Tower 近くの絶景の地で祝ってくれた多くの San Franciscans に分れをつけて翌日（May 29）この Gemini, the twins は本命の New York へ飛ぶ。体重 250 ポンド（妻 290 ポンド）の超大型の小学校の先生が大陸横断にさそってくれた。英会話の練習を兼ねて、丁度ひとつきの旅を Arterial 90 に沿って KOA での自炊生活が始まる。印象的だったのは、Niagara Falls at Canadian side と 西伊豆に似た Wisconsin Dells と史地 Sioux Falls (Pipestone), そして米人が Shrine と呼ぶ Mt. Rushmore だった。帰途、Yellowstone (Old fithful geyser), Great Salt Lake, 国境の Glacier, NP, Vernal (fossilized dinosaur), Fort Laramie (& corral), Chyenne, Denver, Des Moines, and CHI-SYR という Arterial road 80 を約 1 週間余りで突破し、Volkswagen camper の旅を終えた。西岸 Monterey の日本料理家の豆腐（手づくり）、SJC と OAK の景色など良き思い出になった。

今はただ静かに図書館に入り読書するのみ。週 2 回の講義（昼 History of Economics, 1:15-4:30, 夜 Postwar Economic History of Japan, 6:30-9:20）以外は研究会の報告（UC-Economic Society）が月 1 回あるのみ。4 週間毎に exam or quiz それも作成に time-consuming な multiple-choice type で約 50 問、……しかし夜は雪の降る北部 NYC の室内談話が楽しみ。学生が時々たずねて来る。日本人は数学に得意と聞いた、といって、コンピューター直結の研究室を与えてくれた。無論、僕には使いこなせない。同室するのは、two Ph. D. and three MS をもつ物理学者の A. Mills と数学史担当の何も学位のない Wayne Palmer で、この Wayne の家に寝起きしている。この Fall Semester (Sept. 6- Dec. 23) を終えたあと、近くの NY 州立大 SUNY at Albany と Hamilton College で集中講義があるので、それを終了 (Jan. 17- Feb. 4) したら直ちに帰国する予定。帰途、欧州経由で LON, PAR, and ROM など見物

する積りだったが変更した。仏語や伊語も語れずに行く積り？ と同僚に忠告されたことと、rush course を約束したためだが、欧州回りの飛行切符クーポンを見せたら、Oh キューパンと言う。クもキューも数字の9は両方の発音があるから、どちらでもよいかも。

この大学 (UC of SYR) に日本専門家の Dugan と Rosen がいて、僕も助成金を SFO-Office of the Conference on Asian Studies から得て、数日間を会議の参加に充てたが、日本からの参加者はアジ研と北大からの計2人で淋しかった。でも日本史研究家の Marius Jansen (Princeton) や日航から転じて20年勤務の Hiroshi Itoh (SUNY at Plattsburgh) とゆっくり話せたことは収穫だった。僕の研究室には事務職員から貰ったススキが何本か vase に入れて日本風情を豊かにしている。来室者の誰もが miscanthus どころか fountain grass とさえ知らず、みたこともない、というほど。夏の旅でも蟬の声すら聞かず、ほとんどが知らない。大方, locust とまちがえ, cicada, cigala, or cicala と説明しても通じない。文化の相違をみる。やっと 7-year locust ないしは June bug で決着。最後に一言、戦後30年過ぎた今でも対日感情は東部では必ずしも良くはない。一種の yellow peril みたいに残存し、日本人そのものは好感もてるけれども、政府はダメだとか、漁業問題など、昨日の新聞では超大国日本 (Japan, superpowers) の態度! (The Daily Press, Utica, N. Y., Tues., Nov. 9, 1976) という見出しで Japan's delegate refused to recognize a U. S. law と caption に subtitle をつけ論難している。アメリカでは potted plant が盛んなので、これを利用して、「日本経済は戦後アメリカが試みてきた potted-plant economics のなかの the first wrangler なんだから、つまらぬことで感情に走らないでよ」と説明するけれども、近頃——本当に平瀬先生じゃないけど——気になることが多い。例えば、Bicentennial を日本側で Fete for Uncle Tom と論評したり、千葉県からは Launching of balloons filled with flowers and goodwill messages が企画されているとか、これは戦時中の 9,000 balloon bombs across the Pacific を思わせて “We think that could still be a little sensitive”. などと報じている。英国の悲劇 (相次ぐ切下げ) は £ 1 = \$ 1.57 と

伝えられ、戦後の $\pounds 1 = \$ 4$ や $\pounds 1 = \$ 2.8$ などを想起するが、大和撫子の強さは経済力に支えられると intractable な存在になり易く、国際協調という点からも今後の日本は “must tread a thorny path” と思えてならない。

僕の当地での夜間用の教材の表題ですら、次の如く気になる exaggerated expression が使われている。——ASIA'S NEW *GIANT*, how the Japanese economy works, ed. by Rosovsky and Patrick, 1976 (The Brookings Institution). なお、この教材は大学側から推薦があったもので、他に 2 冊使用している。値段は \$10 プラス \$9 で、約 ¥ 6,000 になる。